

(メッセ海外通信 VOL. 52 2020年1～3月号掲載記事)

～住民達のアイデアから誕生した観光地 楊林洞 (ヤンニムドン) ペンギン村～

下関市総合政策部国際課
(釜山広域市派遣職員)
白野 哲

～クレアソウル事務所の紹介～

皆さん、一般財団法人自治体国際化協会（略称 CLAIR、以下クレア）という団体をご存じでしょうか？クレアは、地域の国際化を推進するために設立された自治体の共同組織で、現在、ソウル事務所を含め世界の7つの主要都市に海外事務所を設置しています。クレアでは自治体の海外活動の支援や地域の国際化、海外の地域活性化方策などについて情報収集や調査研究を行う一方、対日理解促進を積極的に図るため、わが国の地方自治制度や地方行財政制度を中心とした諸事情を海外に紹介しています。また、ソウル事務所では、韓国内に駐在する日本の地方公務員間のネットワークづくりや現地視察を通じて韓国の先進事例等も紹介しています。

今回は先進事例として視察した光州広域市の「まち起こし」のユニークな一例をご紹介します。

～楊林洞 (ヤンニムドン) ペンギン村～

「まち起こし」と聞くと、政府主導の政策を連想される方も多いかと思いますが、今回ご紹介する事例は地域住民が主導した事例です。

近年、韓国には各地に「フォトジェニック」や「インスタ映え」するようなカラフルな街が増えていますが、光州にもそうした写真映えする街ができ、ひそかな話題を呼んでいます。その一つが「楊林洞ペンギン村」と呼ばれる廃品アートの街です。この街はペンギン村と呼ばれていますが、特にペンギンがたくさん飼われている場所というわけではありません。街の名前の由来はさておき、この見どころは、写真にあるような無数の掛時計をはじめ、壁面や空き地を埋め尽くす無数のがらくたにあります。

楊林洞の住宅地の片隅にあるこの地域は、2013年頃から住民たちにより掛時計やその他がらくたが飾られるようになり、韓国のあちこちで見かける壁画村

とは一線を画した異色の街づくりがなされるようになりました。それがいつしか話題となり、いまでは年間数十万人が訪れる光州の観光スポットのひとつになっています。

もともとは高齢者が多く住む寂しい街でしたが、空き地の管理者がもっと活気のある街にしたいと思い、近所の空き家に積まれていた廃品やガラクタを使って、あちこちに飾り始めたのが始まりです。

ちょっとしたアイデアかもしれませんが、街に活気を取り戻したいという住民の思いと行動が、「インスタ映え」を求める時代の流れとマッチし、観光スポットとして生まれ変わった興味深い事例ではないでしょうか。本事例が過疎化の進む地域の活性化や街づくりのヒントとして参考になれば幸いです。

さて、気になるペンギン村の名前の由来ですが、一带の住民はご年配の方が多く、その歩く姿がよちよち歩きのペンギンを彷彿とさせることから名付けられたそうです。



【ペンギン村の始まりとなった空き地】 【壁一面に飾られた時計】